

# 発達臨床心理学概説

## エリクソン (Erikson EH) の生涯発達論

Ⅶ 老年期							統合 対 絶知 (wisdom)
Ⅵ 成人期						世代性 (生殖性) 対 世話 (care)	
Ⅴ 成人前期					親密 対 孤立 愛 (love)		
Ⅳ 青年期				アイデンティティ 対 アイデンティティ 危機 忠誠 (fidelity)			
Ⅲ 学童期			勤労性 対 劣等感 有能 (competence)				
Ⅱ 遊戯期		自主性 対 罪悪感 目的 (purpose)				(注)	
Ⅰ 乳幼児期	基本的信頼 対 基本的不信 希望 (hope)	自律性 対 恥、疑感 意志 (will)					プラスの力 対 マイナスの力 人格的活力
	1	2	3	4	5	6	7

- フロイト (Freud S) は精神的発達論を提唱したが、エリクソンは心理・社会的な要因を重視した。
- プラスとマイナスの面のダイナミックなバランス関係が発達上の危機となり、発達課題をこなすことで次の段階に至る。
- アイデンティティの漸成説と呼ばれ、老年期が最終的な統合の形。

(下山, 2009)

## 生涯発達の視点

- 発達概念の変化
  - 従来は衰退イメージが強かった中高年が有能で、新たな進歩もみられることが指摘されるようになった。
  - 生涯発達においては生物学的な次元ではなく、人格や人徳、知恵といった人間性レベルでの向上や成長の価値も認められるようになってきた(心理・社会・文化的文脈の重視)。
- 生涯発達における発達観の特徴
  - 年齢による変化だけではなく、個人差による変化が大きい。
  - 幼児期だけでなく、生涯のいつでも大切な変換期とみなしうる。
  - 生涯を通じて人間は柔軟に変わる可塑性がある。
  - 一様な発達段階でなく、人によって多様な発達方向がある。

## 発達段階毎の心理的問題

- 乳幼児期・児童期(分離個体化、心理的社会化)
  - 発達障害
- 思春期・青年期(アイデンティティの模索)
  - 不登校、強迫性障害、摂食障害、パニック障害、統合失調症、境界性パーソナリティ障害、双極性障害
- 中年期(人生の午後)
  - 生活習慣病、大うつ病、男性の自殺、空の巣症候群、上昇停止症候群、燃え尽き症候群
- 老年期(サクセスフル・エイジング)
  - 様々な心身の障害、大うつ病、認知症

## 発達障害とは

- 子どもの発達の途上において、なんらかの理由により、発達の特定の領域に、社会的な適応上の問題を引き起こす可能性がある凹凸を生じたもの。
  - 生来の素因を持って生じた発達障害に対して、さまざまなサポートや教育を行い、健全なそだちを支えることによって、社会的な適応障害を防ぎ、障害ではなくなるところに、発達障害の治療や教育の目的がある。
  - 子どもを正常か異常かという二群分けを行い、発達障害を持つ児童は異常と考えるのは今や完全な誤りである。発達障害とは、個別の配慮を必要とするか否かという判断において、個別の配慮をしたほうがより良い発達が期待できることを意味している。

(杉山、2007)

## 発達障害の諸相

第一グループ	精神遅滞	標準化された知能検査でIQ 70未満、および適応障害	第三グループ	注意欠陥多動性障害 (ADHD)	多動、衝動性、不注意の特徴および適応障害
	境界知能	標準化された知能検査でIQ 70以上85未満		学習障害 (LD)	知的能力に比し学力が著しく低く通常の学習では成果が上がらない
第二グループ	知的障害を伴った広汎性発達障害	社会性、コミュニケーション、想像力の3領域の障害	第四グループ	発達性協調運動障害	極端な不器用さ
	高機能広汎性発達障害	上記の障害を持ち知的にIQ 70以上		子ども虐待	子どもに身体的、心理的、性的加害を行う、子どもに必要な世話を行わない

(杉山、2007)

## 知能と知的障害 (精神遅滞)

- 心理学における知能の捉え方:新しい場面に適応する際に、これまでの経験を効果的に再構成する能力。
- 操作主義的な考え方:知能テストで測定されたもの。
- アメリカのウェクスラー (Wechsler D) が、サーストーン (Thurstone LL) の多因子説の流れをくむウェクスラー式知能検査 (WAIS、WISC、WPPSI)を作成した。
  - 全検査IQ、言語性IQ、動作性IQが算出される。
  - $\text{偏差IQ} = 100 + 15 \times (\text{検査得点} - \text{基準年齢集団の平均値}) / (\text{基準年齢集団の標準偏差})$ 。
- 知的障害は、IQの値で、軽度 (50 ~ 70)、中等度 (50 ~ 35)、重度 (35 ~ 20)、最重度 (20未満) に分けられる。

## 広汎性発達障害 (PDD)

- 自閉症:カナー (Kanner L) が1943年に報告。ウイング (Wing L) が1996年に自閉症スペクトラムを提唱し、社会的関係、コミュニケーション、想像力と創造性、という3つの領域における問題を、その共通点とした。
  - 他人との社会的関係の形成の困難さ、言葉の発達の遅れ、興味や関心が狭く特定のものにこだわること (文科省定義)
- アスペルガー障害:アスペルガー (Asperger H) が1944年に報告。「著しい言語の遅れがない」点で自閉症と区別されるが、自閉症スペクトラムに含まれる。
- カナーは、自閉症の中核的障害を情緒的な関わりができない点としたが、1968年にラター (Rutter M) が認知・言語の障害が中核であるとし、現在では脳神経系の発達プロセスに生じた障害であると考えられている。

## 注意欠陥 / 多動性障害 (AD / HD)

- 脳腫瘍や脳炎、脳出血などの目に見える病的所見や麻痺、けいれん、精神遅滞といったハードな神経症状や知的な遅れはないが、読み、書き、計算が困難といった学習上の問題や、落ち着きのなさ、多動、不器用さなどの行動上の問題といったソフトな症状がある状態が、微細脳損傷・微細脳障害 (MBD) と呼ばれていた。
- MBDのうち、学習上の問題が「学習障害」、行動上の問題が「注意欠陥多動性障害」という概念で整理された。
- 不注意優勢型、多動 - 衝動性優位型、混合型の3つに分類される。学齢期の子どもで3~7%に認められ、男女比が2:1~9:1とされている。

## Learning disordersと Learning Disability (LD)

- 文科省は学習障害の定義として、全米学習障害合同委員会のLearning disabilityを踏襲している。
  - 学習障害 (Learning disabilities) とは、基本的に全般的な知的発達 (一般知能) に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態 (文科省定義)。

### DSM- の分類

- 学習障害 (Learning disabilities) {
- 学習障害 (Learning disorders)
    - 読字、算数、書字表出、特定不能
  - 発達性協調運動障害
  - コミュニケーション障害

(下山, 2009)

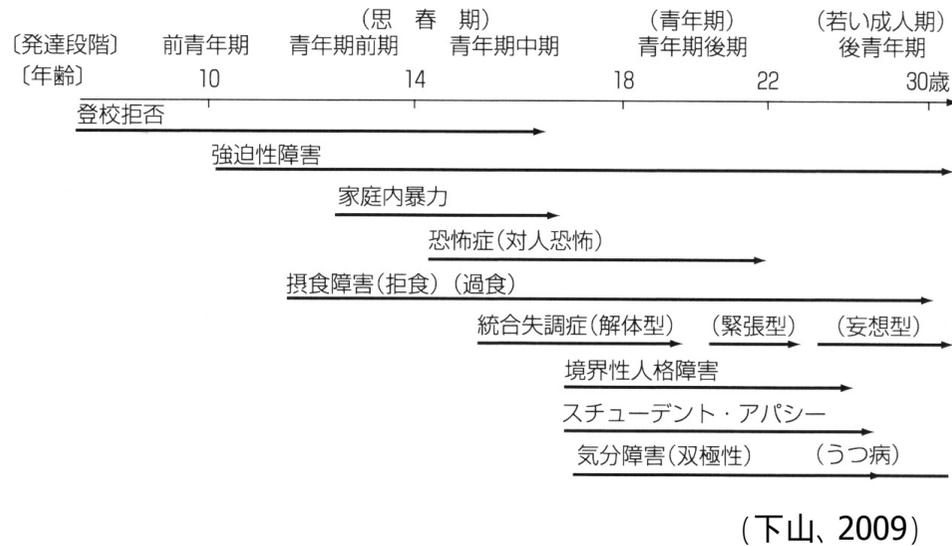
## DSM- による発達障害の分類

- 精神遅滞: 18歳未満に発症した明らかに平均以下の知的機能と適応機能の障害をもつ
- 学習障害: 生活年齢、測定された知能、年齢に応じた教育などから期待される基準よりも相当に低い学業的機能によって特徴づけられる
- 発達性協調運動障害: 生活年齢、測定された知能などから期待される水準よりも相当に低い協調運動能力によって特徴づけられる
- コミュニケーション障害: 表出性言語障害、受容・表出混合性言語障害、音韻障害などのように、会話、および言語における困難さによって特徴づけられる
- 広汎性発達障害: 自閉性障害や、アスペルガー障害 (自閉的精神病質)、レット障害等を含む、多彩な領域における発達の重度の欠陥および広汎な障害によって特徴づけられる
- 注意欠陥および破壊的行動障害: 不注意および/または多動性・衝動性の著明な症状をもつ注意欠陥・多動障害や、他人の基本的権利あるいは年齢相応の重要な社会規範または規則を犯す行動様式によって特徴づけられる行為障害等が含まれる

## 思春期・青年期の心理的問題

- 思春期は身体的成長の期間を意味し、青年期は精神発達上の時期を意味する。
  - 青年期の終わりは、いつを「大人」とするかによって、30歳前後まで遷延している。
- 思春期・青年期の発達課題
  - (1)対人関係の変化と親からの心理的独立、(2)第二次性徴によって生じる身体の変化の受け入れ、(3)アイデンティティ確立への着手開始と模索 (心理的モラトリアム)
  - 現代的様相: 対人関係の希薄化と、メールやチャットなどを介したコミュニケーションの二重構造。
- アイデンティティ確立の必要性和危険性

## 青年(春)期の発達段階と心理障害の好発時期



## 中年期の心理的問題

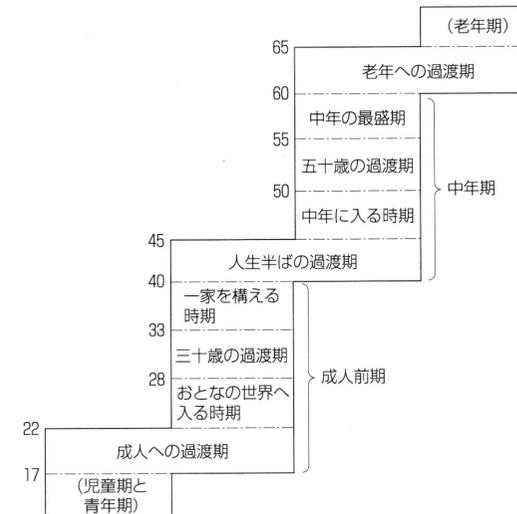
- ユング (Jung CG) は40歳前後の中年期を「人生の正午」と呼んで、中年期を大きな変化が起こる時期とした。
- 中年の危機
  - 日本では、昔から「厄年」という慣習がある。
  - 中年期は、身体的には更年期(40歳～65歳)と重なる時期。
  - 母親役割の喪失感から「自分には何もない」という空虚感、抑うつ感を感じる場合もある(空の巣症候群)
  - 仕事の挫折感から、能力の限界を感じて仕事へのやる気を喪失し抑うつになる場合もある(上昇停止症候群)
  - 過剰に頑張りすぎて燃え尽きてしまったり(燃え尽き症候群)、その結果過労死に至ることもある。
- 世代性: 家庭でも、仕事でも次世代を育てる役割を担う。

## 青年期の発達課題

両親からの自立	実家を離れ、独居する者も増えてくる時期。それまで役割モデルであった親への批判的視点も増す。そのために生じる物理的・情緒的な不安定さから、安定へ向けて自分をコントロールしていく。
性役割の同一性	第二次性徴で生じた身体的変化を受容するとともに、その性として社会から期待される性役割と自身のあり方の合致について考える。結婚も視野に入りうるので、異性にどう見られるかという点でも、性役割を意識する。
道徳性の内在化	自分が自立して生きていこうとする社会にある既存の価値体系と、自分がそれまで培ってきた価値観を合致させつつ、自分なりの価値観を再構成していく。
職業選択	就職を前にし、迷いながらも、職業を選んでいく。自分の職業観や能力、適性を吟味する。職業のための準備期間でもある。
アイデンティティの確立	上記の4つのほか、友人関係、趣味、自分の性格などさまざまなことを吟味し、自分というものを問い直す。これらを統合し、アイデンティティ(自我同一性)を確立する。

(下山, 2009)

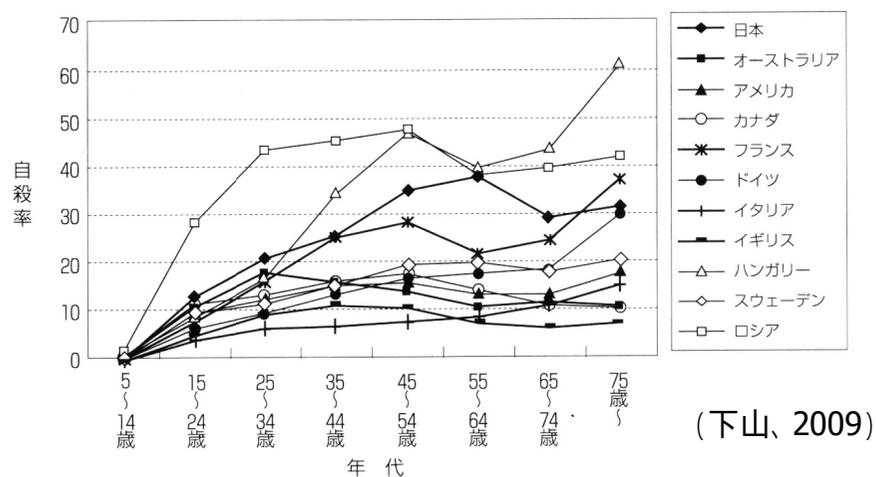
## 成人前期と中年期の発達段階



- レビンソン (Levinson DJ) は、図のように、40歳から45歳までを人生半ばの過渡期と位置づけ、中年期には「若さと老い」「破壊と創造」「男らしさと女らしさ」「愛着と分離」という対立が生じ、自己の内部だけでなく、外界との関係における葛藤が生じる危機期であるとした。

(下山, 2009)

## 国別年代別自殺率



- 明らかに中年期(それも男性)に偏った自殺率の高さが特徴。

## 参考文献

- 杉山登志郎:発達障害の子どもたち. 講談社現代新書、2007
- 文部科学省:主な発達障害の定義について.  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/tokubetu/004/008/001.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/004/008/001.htm)